

京都以外から 京都を見たとき、 そこに地球規模の 言葉が浮かんだ。

アツという間に「当たり前」の存在
その屋台骨を支えるユニークな存在

その昔、ここは「ベツチャオクツチャオ」という飲食店だった。そのまた昔、ここは「ストラスアイラ」というバーだった。さらにそのまた昔、ここは「レイア・ガイア」というディスコだった。今、ここは「世界WORLD」というクラブである。5年前、この店が現れて以来、あまりにもすくさま「当たり前」になってしまった。改めてその素性を窺うことができないほどに。

DJ SANONONが、EMMAが、大沢伸一が、田中知之が、m-floが、当たり前のようにここに来るようになり、少し特異な空気でもって、だが京都に馴染んだ。いや、馴染んだようで、特異な空気を今も持つ

ている。それまでは感じなかったことが、いま感じられるのは何故だ。昔と今の違いは何だ。その解は、ひとりの男に行き当たる。中本幸一、5年前、若干25歳でここを預かり、ここまでのクラブに仕立て上げた人物である。

**彼は僕を悩ませる、でも刺激がある
部下には「あれくらいやれ」と(笑)**

同氏と縁の深い人物の証言がある。ひとりには、「あじびる」グループの今津光浩さんである。「あじびる」といえば、「和S」各店をはじめ、いくつもの飲食店を経営する企業であり、「世界WORLD」がある「イマージアムビル」も同社のものだ。中本さんが同社唯一のクラブを預かるプロデューサー兼全権代理人とするならば、今津さんは飲食店全体をマネージメントする人だ。その今津さんは言う。「彼(中本さん)は自由人。僕はあじびる人(笑)。彼みたいになりたいと思うこともありますよ(笑)。彼は僕を悩ませるんです。でも刺激がある。和Sの店長達にも「あれくらいやれ」と(笑)。口調は冗談半分、本気半分で、要は「彼は好き放題やっている」と言いたいのである。企業の屋台骨として、飲食店が堅実な経営を求められる(実際、実現もしているのだが)分、自由奔放に攻めに転じる中本さんに見習えと言っているのである。ただ攻めているだけで空振り続きではこうは言わない。結果を伴っているからなおさらなのである。

**木屋町と一線を引いていてなお、
木屋町でこれだけできるんだな、と**

もうひとりには「rhythmi [miki] という飲食店のオーナーで、現在はデザイン事務所や店舗プロデューサーなども手がける以西裕介さんである。同氏が中本さんに出会ったのはいずれの肩書きもまたなく、ひとりのDJとしてであった。「DJとして『出る人』と、『呼んでくれた人』という関係でした。25、26歳の時に出会って、歳もほとんど同じだし、『若いのにこんなことができるんや』と、『追いつき追い越せ』というのではないだろうが、組織を背負う立場になった今だからこそ、その思いもひとしおなのだろう。



m-floの☆Taku Takahashi (右端)、VERBAL (左端) 両名が訪れた日の一景。仲良く「ご」のサイン、やんちゃ仲間が遊んでいるようなシーンである。このリベラルさも中本世界の構成要素だ



大沢伸一と田中知之による「BACK II BACK」での1シーン。掛け橋なしに一曲ずつを交代で回し続けるという大変変わったイベント。直後、大沢伸一は「本当に楽しい」というコメントを残している。実は5年前のオープニングもこの二人



同じくm-floが訪れた「Tachytelec Night」での一枚。m-floと共にやってきた日之内結実とRyohaiを含めた当日のオールスターキャスト

「ご当地京都も全国も世界も地球も一緒くたになってしまっただけである」

今だからリスベクトする理由もある。「若いという理由で」叩かれもしたと思うし、決して広くはないクラブという業界でね、人気者（のゲスト）の取り合いもあったろうし、でも（京都では暗黙の了解で御法度とされるようなことも）ブレイクスルーしたことが凄いですよね。そして以西さんが思うのは、「木屋町と一線を引いて、木屋町でこれだけできるんだ」ということである。それが文頭に書いた「特別な空気」にあたるものなのだと思う。

「世界WORLD 5th ANNIVERSARY ARE YOU READY? LET'S 5 WORLD」と名付けられた5周年記念月のマンスリースケジュールを見ると、それがより如実になる。DJ SANCON、SAYANSE CREWと言った京都随一のDJたちは、活動の拠点が木屋町だ。とりわけDJ SANCON主催の「ESSENSIAL」というイベントは、コンスタントな集客があることで知られ、同店もしくは木屋町もしくは京都を代表する定例イベントのひとつに挙げられる。そのイベントをはじめ、5周年ならぬ「5執念」の意気込みで臨んだ5週間は、1週目「EMMA（イベント「EMMA HOUSE」）初陣は「大運元祭」と称して来場者全員無料のパーティを敢行。気持ちで勝負、同店の動員記録更新。その数1333名。2週目・m-flo（同「Tachytelec Night」）、3週目・大沢伸一（同「FEARLESS」）、「BACK II BACK」、4週目・フジロックの大トリクラスの大作「T.M DELUXE（同「JAPAN TOUR 2006」）」、5週目「千秋楽・田中知之（「BACK II BACK」）」である。大沢伸一・田中知之の両氏については、彼らが京都を拠点にしていた頃、この店はなかったことが興味深い。

「ピラ配り命（笑）。初歩の初歩 それしか考えてないかもしれない」

この特異な空気を生み出すために、この5年で中本幸一という人は何をしたのか？

「ピラ配り命（笑）。そう言っただけ本人は笑うの

だが、自身が京都の出身ではなく、ここしばらくずっと大阪に住み続けているのには理由がある。「この店を預かったとき、やっぱり京都の（他大学生は入れないという意味の）大学のサークルのような独特な世界に入れてもらえない悔しさはあったし、「これ以上のものをやってやろう」という思いはありましたね。やっぱりと店の名前が利いていて、スタッフが一所懸命お客さんを集めるっていうスタイルじゃないことをやろうと思いました。（一般論的なクラブの）初歩の初歩。それしか考えてないかもしれない」。その原点は、「アンディ・ウォールだっけ自分の個展のフライヤーをまいてる」という、東京スカパライズオーストラの谷中教の薫陶だったりする。現場を忘れ、原点をさぼるようになったら終わりという意味だ。

結局「世界WORLD」と併記された形が定番となったが、そもそも店名を漢字にしたのも、「京都以外の人が思う京都のイメージ」だからだ。京都以外というのは、全世界も含むわけで、地球的な意味と、例えば「ESSENSIAL」な「SANCON WORLD（＝DJ SANCONの世界観）」があり、同じように「m-flo WORLD」や大沢ワールド、田中ワールドが現出できるという意味が絡み合っている。

京都も地球も「世界観」の一言で一緒くたにしてしまおう。それすら当たり前になりつつあるのが、5年を迎えた今であり、そのひと月を切り取ったこのシーンの数々は、そのまま「中本世界」を構成しているピースの数々である。そしてこの様子が、京都のクラブの、ひとつの確立されたケースなのである。



【世界】WORLD ワールド

京都市下京区西木屋町四条上ル真町97 イマージム2F～B2F TEL.075-213-4119
22:00～翌5:00/日～木休 ※イベントにより変動。要問い合わせ <http://www.world-kyoto.com>

5周年を機に、思い切ってエントランス、VIPルーム、特殊照明&音響システムを大規模に改装した。むしろこれまで全く改装なしで、「小さいステージを組んだだけ（笑）」で続けてきた方が不思議だ